

日本における庭園と公共空間の設計思想の変遷

徳島大学大学院 学生会員 ○膝 子青

徳島大学大学院 正会員 山中 英生 徳島大学大学院 正会員 尾野 薫

1. 研究背景

日本の庭の起源には、諸説ある。例えば、古くは神様を祭るための島に見立てた石を、池の中に据えた。また、古代中国の長命を求める思想に基づき、仙人の住む島に見立てた庭園も設計されたといわれている。このような盤境、盤座、神池、神島など、日本庭園の起源と言われ、岩石、景山、水池などの要素は、現代の庭園において重要な構成要素のひとつと考えられる。

一方で、現代と違い、古代の人々は自然と強く共生していたとも言われている。飛鳥時代から奈良時代まで、日本の庭園は土地の自然特性に大きく左右されており、多くの庭園は築山を造るとともに、植栽の種類も多種多様であった。平安時代、京都は国家の政治、文化の中心として、中国からの仏教や宗教から大きく影響を受けていた。また、平安時代の承和元年、日本が最後の遣唐使を派遣した後、政治体制や文化の影響を受けながら、日本独自の庭園設計が行われるようになったと考えられる。鎌倉時代から室町時代にかけて、日本の庭園建築はさらに発展し、庭園、池庭、寝殿造庭園、浄土庭園、枯山水、禅寺、茶庭というような新たな禅宗文化を加えた組合庭園が展開されていった。

以上より、平安時代から現代までの日本庭園は、作庭時代の社会、文化、思想によって、様々の特徴が積層されたと考えられる。庭園は、大きな歴史の流れの中で育まれていった文化と自然環境に合わせて変化し、「環境芸術」として日本独自の庭園文化を培ったと考えることができる。

近年、海外からの観光客の増加とともに、日本の庭園は世界中に注目されつつある。日本庭園の作庭手法と様式について、個々の庭園については既に多くの研究や議論が行われている。しかし、日本庭園の設計思想の変遷や、庭園の歴史と宗教との関連についての議論はまだ十分ではない。また、現代の日本では、庭園だけではなく、公開空地や公共空間が数多く展開されている。これらの空間は欧米における広場やパブリックスペースの概念から派生して設計されることが多い一方で、日本らしさやその土地や空間に適した設計が

求められることもある。日本らしさという視点について、庭園の設計思想は分析の視点のひとつとして挙げられるが、この視点に関する議論はまだ少ない。

2. 研究目的

以上より、本研究では、日本庭園の設計思想の変遷や、庭園の歴史と宗教との関連について整理するとともに、庭園の設計思想が公共空間に与えた影響について考察することを目的とする。

3. 対象地と手法

本研究では、京都市内、特に京都盆地内に位置する庭園を対象とした。文献調査に基づいて、庭園の様式や作庭技法などについて、当時の文化、宗教、社会背景について、歴史的変遷を把握する。また、各時代における庭園の特徴と庭園様式を取り上げ、庭園様式と当時の文化、宗教背景との対応関係を把握するとともに、庭園の設計思想と公共空間の設計思想について何らかの関係があるか考察する。これにより、日本独自の設計思想を明らかにすることができれば、今後の庭園設計および公共空間の設計の一助となると考える。

4. 京都庭園の分類

近代の日本庭園は「池庭」「枯山水」「露地」という三種類に分類できる。

「池庭」は古くから日本庭園の主流である。池庭は池泉式庭園とも言い、自然の山水を写して造られる庭園の様式の中に、海や川に見立てられ、山があり、川があり、池があり、いろいろな表情を見せてくれるという庭だった。この様式の庭には、「水」という要素が取り入れられていた。

池庭には大海への憧憬が見られ、時には深山幽谷の趣を現出させたものもあった。石一つでも不老長寿、子孫繁栄の意味が見込まれ、松などの植物によって庭園の景色は一層の変化を見せることができる。

室町時代に作庭された金閣寺では、中国との貿易を盛んにしてきた文化の背景により、図-1・2で示した

ように、この時代の特有的な作庭特徴が見られる。

「枯山水」は主に石や白砂のみで山水を表現している庭園である。水を象徴した白砂を庭に敷き詰め、その白砂の上に石を置き、石組や白砂により空間内には存在しない山や川、または海の波紋を表現されており、島、海、波というような大自然を人為的な空間内に凝縮する形式であった。この様式の庭は、「水」という要素がなかった。

室町時代になると、前の時代の浄土教作庭の影響から庭園を眺める視点が立体化、多面化を生み出して来た。その時代に創建された龍安寺は、石庭、枯山水の方丈庭園で有名だった。

龍安寺の石庭は、禅宗文化の影響を大きく受けられ、白砂の上に大小 15 個の石が配され、およそ 7.5 坪の枯山水庭園になっていた。白砂が演出した石庭は、どの位置から眺めてみても、必ずひとつの石は隠れて見えないように設置されていることで有名である。14 個の石しか見えないのは、「不完全」というイメージが表現され、そこには「自分自身を見つめて、足りないものを見つめ直し、今までの自分自身の探求が目的とされている」という仏教の意味が伝えられていた。「露地」は茶室に付属して設けられた茶庭であった。そのような庭園は、身近な自然に足を踏み入れたように、控えめな庭造りをしていた。灯籠や蹲などの人工の景物を置いているのが特徴であった。手を加えて作っているため、自然の趣が有り、華美な飾りがなくて、簡素な造りとしては日本の独特の精神につながった。

安土桃山時代になると、お茶を飲むことを芸術化し、茶道というような芸道が発展し、今まで日本特有な芸術体系として認識されていた。当時の茶道の大成者であった千利休は、「茶道が禅ないし、仏教と深い関係がある」と述べていた。下の図で示したように、千利休一派の茶室は自然と人文の独特の侘び寂びの精神につながった。

5. おわりに

今までの研究は、京都庭園の分類において、代表的な少数の庭園に基づき、様々な要素の特徴を把握するとともに、庭園の時代のイメージを明らかになってした。今までの内容の検討は決して十分ではなく、今後の課題としては、日本庭園は歴史の中でいかに変化して来たのかという視点から庭園から公共空間への変遷

を捉えることにより、日本庭園と公共空間の変遷をより詳しく検討していく。

参考文献

- 1) 篠沢健太 (2000) : 京都の日本庭園の様式と土地自然との関わり。
- 2) 古橋信孝 (1998) : 平安京の都市生活と郊外, 歴史文和ライブラリー 36. 吉川弘文館. 東京. 190pp.



図-1 金閣寺の葦原島は視点場である金閣の正面に位置し、不老不死の仙人が住むとされる「蓬莱島」を表現



図-2 蓬莱島（葦原島）へ向かう集団船(宝舟)が夜のうちに船溜まりに停泊している姿を抽象的に表現したもの



図-3 七五三の庭, 奇数は永続性を示す縁起の良い数字とされ、室町時代以降このような手法がよく使われた

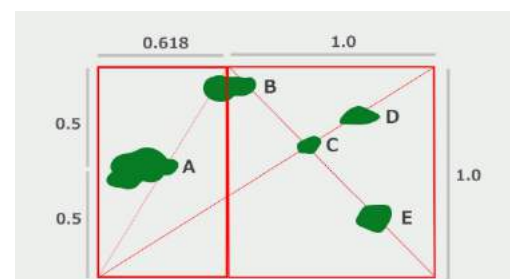


図-4 石庭は黄金比「1:1.618」であった



図-5 千利休の流れをもつ茶室「既白庵」のある桂春院



図-6 白砂の溪流に流れ込む様子を見立てていた